

## 213. 伊吹山山頂出土の石鏃

### 1

滋賀県と岐阜県の境にそびえる標高1,377mの伊吹山は、周囲の山波よりひときわ高く、とりわけ西方から南方の近江側から眺める山容は、秀麗かつ壮大である。また、雪におおわれた姿の気高さは、古代より霊山として畏敬されていたことを知るに十分なものである。

私は、平成2年(1990)11月に、山頂にある経塚の現状を見るため、伊吹町教育委員会の高橋順之さんに案内を乞うて登頂した際、下から眺めると峻険な伊吹山も、登ってみると意外に山頂が平坦であることに驚いた。しかも、山頂は石灰岩の露頭だけではなく、その上に赤土と黒土が全面にわたって覆って、広々としたお花畑を形成していることを知った。また、山頂より少し下った、北東のお花畑の中には、弥三郎池という湿地もある。

私の知っている山で、下からの峻険な眺めに対して、山頂が平坦で広々としている同様な景観に、六甲山系

の神戸市の菊水山(城ガ越山)458.9mがある。この山では、山頂から縄文時代の石鏃などが出土していることから、さっそく伊吹山でも石器の出土があるのかどうかを調べてみた。案の定、予想は的中しており、早く昭和16年(1941)発行の『改訂近江国坂田郡志』の中に、山頂から石鏃の出土していることが記載されていた。

山の頂や、高山の山頂近くから出土する石鏃については、かつて比叡山から出土した縄文時代の石鏃の資料紹介を兼ねて、各地の例を紹介したことがあった(拙稿「比叡山出土の石鏃をめぐって」、『滋賀文化財だより』15 1978)。しかしその時は、伊吹山々頂より出土した石鏃については気付いておらず、漏れ落ちている。

### 2

伊吹山々頂より出土した石鏃は、残念なことに現在その所在が不明である。かつて、伊吹山中腹の山荘に、伊吹山麓出土の考古資料が展示されていたが、山荘が火災にあって多くの遺物が紛失しており、その中にこの石鏃が混っていた可能性があるとい

十四



十五



十六



十七



第2図



第1図 伊吹山全景

う。幸い『改訂近江国坂田郡志』に、石鏃の記述と写真(第2図)、略図があり、そこより資料を紹介しよう。

「 伊吹山々頂発見の石鏃

霊峰伊吹山上(標高千三百七十七米)の国立測候所の伝田広吉技師は、交代登山の都度、先住民族の遺物捜査中、偶然伊吹山頂石室付近の道路上に於て、昭和十二年五月七日一個、昭和十二年九月三十日一個、昭和十二年十月二十二日に一個、昭和十四年九月十四日二個累計五個の打製石鏃を発見拾得したり。石鏃は共に無莖にして、二個は石質玻璃質珪岩なり(写真十七・十八)<sup>①</sup>。二個(写真十四・十五)は蛋白石質にして一個は完好一個は莖部両端を欠壞す。」

とある。

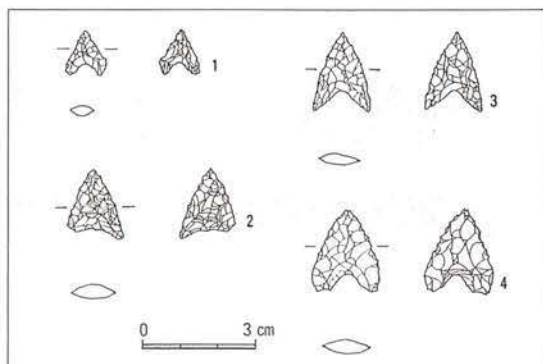
石鏃の実物は所在が不明であるため、残念ながら実物を観察することはできないが、『改訂近江国坂田郡志』の記載を、伊吹山山麓部の遺跡より出土している石鏃の石質から推測して、おそらく石材はチャートではないかと思われる。石鏃の時期は、『改訂近江国坂田郡志』の写真などから、形態や加工がよいことからみて、縄文時代のもと考えてよいのではないだろうか。

その後も機会あるごとに、『改訂近江国坂田郡志』に記載されている石鏃の所在を求めていたところ、それからしばらくして高橋順之さんから、伊吹山山頂出土の石鏃が見つかったと連絡があった。

高橋さんが知らせてくれた、伊吹山山頂出土といわれる石鏃は、地元の山小屋の経営者の方が所蔵していたもので、合計4本あった(第3図)。石鏃は、チャート製のV字型をした無莖鏃であった。ところが、その形から『改訂近江国坂田郡志』の写真図版に載せられているものでないことは一目瞭然であった。伊吹山山頂で出土した石鏃は、『改訂近江国坂田郡志』に記載されている5本だけではなかったのである。その後、その石鏃を調査された高橋さんの報告によると<sup>②</sup>、現存する石鏃4本のうち、小形の1点は、『改訂近江国坂田郡志』に掲載されている石鏃のうち、写真十四のもので同一の可能性があるという。

3

8本の石鏃の出土を知ったときから、伊吹山山頂出土の石鏃は、まだあるのではないだろうかという探究心が起こった。山上の草原は、県指定天然記念物伊吹山地草原植物及びその自生地、山頂の山小屋付近と巡回コース以外立ち入りできないが、遊歩道の柵杭の修理の際や、道の断面の路頭などを何回か観察に登ったりもした。また、他にも石鏃の採集者がいないか、考古学関係者や郷土史家の人達に伊吹山山頂出土の石鏃の話をして歩いた。現地での表面採集は、これまでの



第3図 伊吹山山頂出土石鏃実測図

ところ不首尾に終わっているが、石鏃の採集者については、発掘現場や遺物写真などをお願いする写真家の寿福滋さんが、かつて山頂で石鏃を採集していたようだとの話を聞き込んだ。さっそく、寿福さんに会ってお話をうかがうと、今から14、5年ほど前のことで、現在遺物はどこにしまってあるのかわからないという。しかし、採集地点などはよく記憶されており、参考になることも多かった。

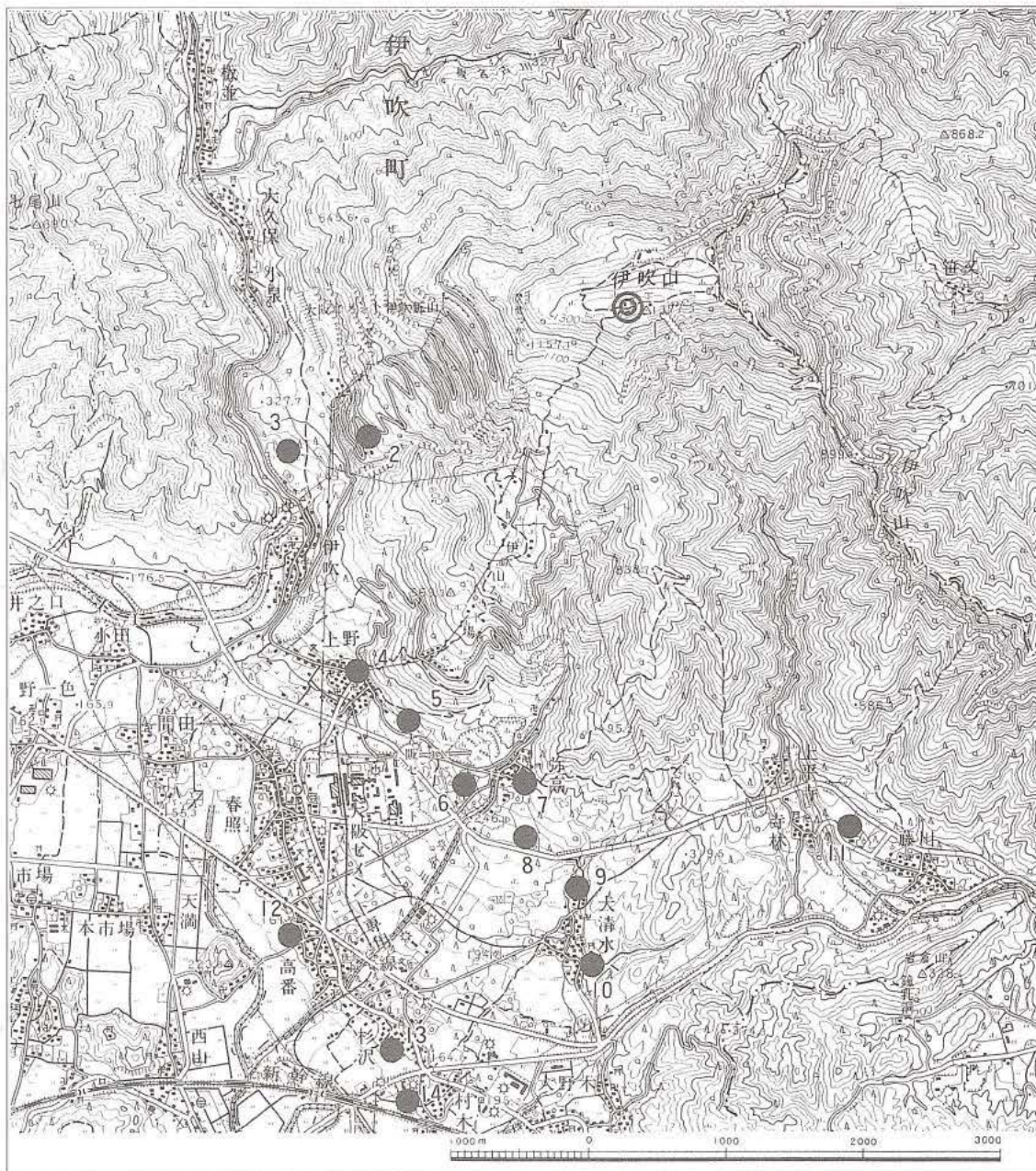
寿福さんの石鏃採集地点は、山頂でも西よりの眺望のすばらしい岩場へ続く遊歩道であったという。私のこれまでの観察では、そのあたりの遊歩道の断面に見える基本土層は、下から順に、石灰岩の岩盤の上に赤土が乗り、その上に黒土が堆積し、表土となっている。採集したのは石鏃が1点と、他に剝片があったという。山での石鏃の出土は偶然の発見によることが大半で、考古学の知識を持った人の採集の証言は貴重である。

剝片を伴う同様な例は、比叡山の東塔での石鏃の出土例もそうである。この場合は、発掘調査によるもので、石鏃とともにチャートの剝片が確認されている。

4

伊吹山周辺の縄文時代の遺跡の分布を見ると、山麓には太平寺遺跡(太平寺)430m・伊吹遺跡(小泉)230m・上野遺跡(上野)230m・人塚遺跡(上野)230m・野頭遺跡(上野)240m・堂ノ前遺跡(弥高)300m・東野遺跡(弥高)250m・井の田遺跡(大清水)210m・大清水遺跡(大清水)220m・上平畑遺跡(上平寺)220mがあり、さらに数十メートル低い扇状地上には、高番遺跡・杉沢遺跡・村木遺跡などが知られており、石器や土器などが出土している。これらの遺跡のうち最高所に位置する、山腹より石斧の出土した太平寺遺跡と比べても、伊吹山山頂遺跡の立地とは約940mほどの比高差がある。

山麓の標高200m前後に遺跡が多く分布することは、当時生活の場がこの高さに適していたであろうことは疑うまでもない。現在の植生を見ると、遺跡と重複する山麓には、樹木が茂っているが、標高500m程の三合



第4図 伊吹山周辺の縄文時代の遺跡

	遺跡名	立地	出土遺物
1	伊吹山頂遺跡	山頂	石鏃・剝片
2	太平寺遺跡	山腹	石斧
3	伊吹遺跡	山麓	土器(中期)・石斧・石剣
4	上野遺跡	山麓	石斧
5	人塚遺跡	山麓	石棺
6	野頭遺跡	山麓	石鏃・石斧
7	堂ノ前遺跡	山麓	石鏃
8	東野遺跡	山麓	石錘・石鏃・石斧

	遺跡名	立地	出土遺物
9	井の田遺跡	山麓	土器(中期)・石器
10	大清水遺跡	山麓	石棒
11	上平畑遺跡	山麓	石斧
12	高番遺跡	平地	鼓石・石鏃・石斧・石棒
13	杉沢遺跡	平地	土器(晩期)・石斧・石棒 御物石器
14	村木遺跡	平地	石斧・石棒

目以上は草地となる。現在と多少の違いはあったとしても、こうした植生分布は縄文時代もそう差違はなかったものとする。縄文時代の場合、山麓には重要な食料源であるクリ・ブナ・クヌギなどの広葉樹林帯であったと考えてもよいだろう。また、シカやイノシシなどの動物も、この広葉樹林帯にもっとも豊富で、結果的に遺跡が密集することになったものとおもわれる。もちろん、すこし標高の高い草原地帯も、狩猟の場として固定的に利用されたであろうが、それはあくまで傾斜の緩い山腹までであろう。

伊吹山山頂より出土した石鏃は、単に獲物を追って移動していた縄文人のキャンプサイトと考えて良いものであろうか。キャンプサイトの立場をとる人は、狩猟に適した平坦で広々とした山上と、弥三郎池などの湿地のあることを根拠とするだろう。しかし、採集された地点は、潤候所よりも西側で、ここには湿地はなく、どちらかといえば風当たりの強い場所ともいえる。また、山麓にも狩猟に適した草原を持ちながら、あえて急峻な山腹を登って、山上へキャンプサイトを求める意味があったかどうか問題がある。

伊吹山の頂上は、大正8年(1919)より業務を開始した山頂の潤候所の観測では、山頂は平均気温が彦根より年間を通じて約8℃前後も低く、風も他の山よりも強い。また、霧の日数が多く、積雪が深いのも特徴であるという。特に冬場は雪が多く、昭和2年(1927)2月には、積雪11.8mを記録しており、降雪期には縄文人の長期滞在はおろか、登頂すら困難ではなかっただろう。気象条件から常識的に考えて、山頂に石鏃を残した人々が登った季節は、おそらく雪解けの初夏から初秋にかけての、雪が降るまでのシーズンであっただろう。それでも、隠れ場所の無い高山の山頂での夏の雷のことを考えると、夏も必ずしも滞在に適した季節とは言えないのである。

こうした悪条件を克服してまで登頂し、縄文人が山頂に遺物を残した理由は、いったい何であったのだろうか。

ここで興味を持ったことは、これまでから各地の山頂や高山で採集された石鏃が、不思議なことに、縄文時代のものに限られているのは、どうしたことだろう。いや、石鏃だけでなく、標高1,246mの相模大山(おおやま)の頂上や、中央アルプスの甲斐駒ヶ岳では、微量ながら縄文土器すら出土している。

江坂輝弥氏は、『日本の考古学』Ⅲに所収されている「縄文時代の生活と社会」の中で、長野県下の早期の押型土器の出土遺跡の分布が、標高1,000mをこえるような高地にもあることを、東北地方の山間に集団で住む猟師——マタギの行動と比較している。

青森県南西部の秋田県境に近い中津軽郡・西津軽郡

付近は、非常に山が深く、標高800mから1,000m級の山が連なっており、この地方に住むマタギは、尾根道を日本海側と内陸部の唯一の通路としているという。そこで、縄文人も同じように、樹木があまり繁茂しない丘陵や、山の稜線の尾根道を交通路に利用していたのではないかと推定している。そして、尾根の鞍部の高地に泉の湧いているようなところにみられる縄文時代の小遺跡を、集落から集落への中継点と考えたのである。

確かに、山間部から平地に抜ける尾根上に立地する、峠の茶屋を思わせるような遺跡もないわけではない。しかし、滋賀県下でみられる山頂遺跡の場合は、伊吹山にしても比叡山にしても、遺跡の分布からみて長野県などにみられる、高所の縄文遺跡のように、連続するものではない。

共通する点といえば、後世、山が信仰の対象となるような山容であることだ。六甲山系にある神戸市の菊水山にしても、わずか458.9mの低い山であるが、独立峰で同じ条件を備えていることは見逃せない。

私は稲作以前と以後とは、人間の山に対する思いが異っていたのではないかと、密かに思っている。稲作以後の古人にとって、生活空間としての山は、里から手が届く範囲の高さを指したのであろう。大阪湾を望む高地性集落をはじめ、湖西にみられる高地性集落も、尾根からみれば遙か下方の山腹に並んでいるのは、その付近までが生活空間としての里山であったのだろう。そしてそれより上は、平地からの比高差が500~600m以上もあれば、生活とは直接縁の無い、まさに神の住む領域であったのだろう。おそらく、峠越えなど特定の道を別にすれば、山には垂直分布による、人と神の住み分けがあったのではなかろうか。

周りの山々より高く、風の吹きすさぶ高山の山頂や、山麓や山腹をうっそうたる樹林に包まれた、あたかも入山を拒むように神秘的な山の姿は、生活空間としての里山とは異なった世界であったに違いない。ただ、面的に、ある広範なテリトリーを生活空間として移動していた縄文時代にあつては、また神観念の相違から、山頂に挑む冒険の炎が燃え盛っていたのだろう。あるいは、日常の生活空間に比べ、風が強かったり、温度が低かったりする気象条件は、自然神と語る場所であったのかもしれない。後の時代に、山岳修行者が求めたものと同じ、感覚があったと考えても不思議ではない。

(兼康 保明)

註

- ①「一七・一八」は「一六・一七」の誤植と思われる。
- ②『伊吹町内遺跡分布調査報告書』(伊吹町文化財調査報告書第3集 伊吹町教育委員会 1992)